

『日本経済の再構築』

著者 小黒一正 (法政大学教授)

日本経済新聞出版社 2200円



1

日本経済の根本3課題を明示 システム改革に具体的提言

評者 小峰隆夫 (大正大学教授)

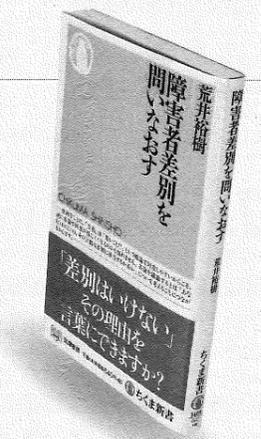
おぐる・かずまさ 1974年生まれ。京都大学理学部卒、一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。大蔵省(現財務省)勤務の後、2015年から現職。著書に『財政危機の深層』など。

Book Review

『障害者差別を問いなおす』

著者 荒井裕樹 (二松学舎大学准教授)

ちくま新書 840円



2

「常識」を疑い、自立の尊重へ 改めて「差別とは何か」問う

評者 新藤宗幸 (千葉大学名誉教授)

あらい・ゆうき 1980年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修了。障害者文化論、日本近現代文学を専門とする。著書に『生きていく絵 アートが人を(癒す)とき』などがある。

日本経済が直面する諸課題を真正面から取り上げた力作である。本書ではまず、「人口減少・少子高齢化」「低成長」「貧困化」の三つが根本的な問題であることが示される。その上で、財政再建、日銀の異次元緩和と財政の関係、年金・医療問題、社会保障、国と地方の関係、成長戦略と格差の是正などの具体的な課題が取り上げられる。

本書の最初に述べられる三つの本質的な問題に取り組み必要がある。そのためには、経済社会全体のシステムの抜本的な改革が必要だというのが本書の主張である。本書の優れているところは次の二つである。一つは、理論的なフレームワークに従って、実際のデータを当てはめた上での実証的な議論が展開されていることだ。例えば、財政の展望に関しては、今後予想される

2016年に神奈川県相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件の反響は、犯行への批判一色ではなかった。犯人の「障害者は生きる意味がない」といった趣旨の発言に共鳴する言葉が、SNSにあふれた。「障害者差別とは何か」を改めて考えてみることはなるまい。

してきたかを解き明かし、障害者差別に新たな視座を提起している。青い芝の会は、肢体不自由児学校・東京市立光明学校(現東京都立光明学園)の卒業生である山北厚ら3人を発起人として、1957年に親睦団体として発足した。支部制度を採用していた同会には、69年にその後の障害者運動に多大な衝撃を与える「青い芝の会神奈川県連合会」が結成される。本書が取り上げる青い芝の

書評欄の書籍の価格は本体価格です。

社会保障費の増加に対応するためには、2040年度に消費税率を22%までに高める必要があること、また、ドーマーの命題(名目GDP成長率と財政赤字を一定に保てば、公的債務残高も一定値に収束するとする説)を紹介した上で、政府が掲げる楽観的な経済前提を離れて計算してみると、債務残高の対GDP比は約300%(場合によっては590%)に達しないと収束しないことなどが示されている。

書では「事前積立方式」によって現実的に移行が可能という提案をしている。この他にも、医療版のマクロ経済スライド方式、道州制の受け皿としての地方庁構想、公務員の議員兼職を認める「政界出向制度」などの独創的な制度が提案されている。日本経済は、コロナショックという未曾有の危機に見舞われている。危機が去った時、危機前に直面していた諸課題に再度向き合うことになる。あるものはこの間に問題が深刻化している可能性があり(財政再建、デフレからの脱却など)、あるものはコロナが契機となって問題解決のきっかけがつかめるかもしれない(生産性の上昇や産業構造の変化)。我々は改めてコロナ前の経済について認識を再確認しておく必要がある。本書はそのための基礎的な議論を提供してくれている。

Book Review

会は、この神奈川県連合会であり、またリーダーであった横田弘、横塚晃一の著作であり行動である。青い芝の会は行動綱領をつくる。そのなかで「優しさ」「同情」「愛」「正義」といった価値観自体が、障害者差別に通じるとした。障害者が自立した人格として生きるには、親はもとより国家の慈恵をも拒否する必要がある。当然、青い芝の会の行動は先鋭となる。川崎市で展開されたバスへの自由な乗車要求、障害児を殺した母親の減刑嘆願運動への反対、優生保護法に「胎児条項」を導入しようとした同法「改悪」反対闘争、養護学校義務化反対闘争が展開される。こうした運動のなかでも「胎児条項」こうした運動のなかでも「胎児条項」反対闘争には、障害者の怒りと闘いの理念が凝縮されている。親や生まれくる子どもの将来を慮って、障害をもつ胎児の中絶を法的に認める

のは、現に生きている障害者の存在を否定する差別なのだ。著者は相模原事件の報道や行事にみる「障害者も同じ人間」というフレーズの問題性を指摘する。この言葉は、ハンセン病療養所の患者同士の結婚に不好手術が強要されたように、障害者も社会の有りようや「常識」に従う思慮深さをもつべき、という意味に通じる。障害者のいう「障害者も同じ人間」とは、他の人に認められている社会参加への機会や権利は、障害者にも等しく認められるべき」という意味なのだ、と著者は強調する。「障害者抜きにつくられた「常識」は、依然として社会を支配し、障害者の自立を拒んでいないか。青い芝の会の問題提起を丹念に再生し、「差別とは何か」を追究した本書は、われわれに重くのしかかる。



国際関係から学ぶ ゲーム理論

岡田 章著 国際協力を実現するために、人々のよいのか? 利害の対立、紛争、交渉、協力、貧困、援助など、人間・国家の行動と社会現象のメカニズムを、ゲーム理論の視点から解明。

維新支持の分析

善教将大著 ●ポピュリズムか、有権者の合理性か 有権者の維新への支持態度を実証的に分析することによって、「大阪維新」の政治を明らかにする。

ロビイングの政治社会学

原田 峻著 ●NPO法制定・改正をめぐる政策過程と社会運動 NPO法の成立・改正過程に注目し、そこに大きく影響した社会運動(ロビイング)の動きを、多様な関係者へのインタビューと豊富な文書資料をもとに分析。ロビイングの存在(成功)条件・戦略とその帰結を、社会学の観点から明らかにする。

●図書目録送呈●